

「原爆文学」再読9——原民喜『夏の花』報告

中野和典

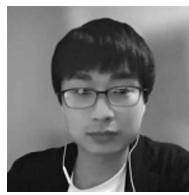


発題 中野 和典

この小特集では二〇二二年一二月四日（日）にオンライン形式で行つた「原爆文学」再読9——原民喜『夏の花』について報告する。当日は発題者の中野和典が『夏の花』はどうのように読まれてきたか？と題して『夏の花』の受容史を整理し、続いてもう一人の発題者の遠田憲成が『原民喜『夏の花』の作品名について——『冰花』との比較から——』と題して短篇『夏の花』と『冰花』の比較から見えてくる問題について報告した上で、参加者全員で討議を行つた。この小特集には二人の発題者の報告を当日の発言順に掲載するので、それぞれの詳細についてはそちらをご覧いただきたい。ここでは全体討議の内容を紹介する。

まず話題になつたのは原民喜とエドガー・アラン・ポーとの関係についてであった。短篇『夏の花』には「不思議なのは、この郷里全体が、やはらかい自然の調子を喪つて、何か残酷な無機物の集合のやうに感じられることがあつた。私は庭に面した座敷に這入つて行くたびに、「アツシヤ家の崩壊」といふ言葉がひとりでに浮んでゐた。」と記されているが、語ることができないとい

う語り方、被爆者を連想させる兄妹の描写、挿入される詩のリズム、光と嵐に包まれた館の崩壊など「アツシヤ家の崩壊」と『夏の花』には細かな表現に至るまで共通性が認められるのではないか、とう意見が出された。これについてはポー研究の中でこれに近い指摘がされているという応答があつた^①。また『夏の花』とポーの墓場詩やロマン派との関係についてもさらに追究すべき点が多いのではないかという発言もあつた^②。次に話題になつたのは『冰花』などに描かれる『新しい人間』についてであつた^③。『新しい人間』とは抽象的な表現だが、エコクリティシズムのポストヒューマンに重なるものなのでないか、あるいはカレル・チャベツクの『ロボット』に描かれる新しい人間に重なるものなのではないか、あるいは生



発題 遠田 憲成

存欲求にしたがつて生きる戦後の人間だつたのではないか、あるいはマルキシズムのようにながる人間だつたのではないか、とさまざまな解釈が示された。いずれにしても「冰花」を発表した一九四七年頃の原民喜は「新しい人間」に希望を持っていたが、結局新たな人間としての像を結ばなかつたようであるという発言もあつた。

次に話題になつたのは「夏の花」のイメージについてであつた。夏の花という言葉からは広島で墓に供えられる盆燈籠なども連想されるが、この言葉はそういう習俗のイメージにもつながつてゐるのではないか、という意見が出された。これについては「永遠のみどり」に「寺の近くの花屋で金盞花の花を買ふと、亡妻の墓を訪ね」とあることから⁽³⁾「あるいは昭和二〇年八月四日の墓参の花もこの黄色い金盞花ではなかつたろうか」とも推測されてゐるが⁽⁴⁾、「夏の花」の冒頭部には「その花は何といふ名称なか知らないが、黄色の小弁の可憐な野趣を帶び、いかにも夏の花らしかつた」と曖昧に記されており、それぞれの読者が思い浮かべる供養の形が投影できるように描かれてゐるのではないかという応答があつた。

次に話題になつたのは原民喜と前衛芸術との関係についてであつた。「夏の花」の末尾における「私」からNへの突然の視点の変化やまるで途中で終わつてゐるかのような小説の結び方には前衛劇の影響があるのでないかという意見が出された。また原民喜は創作の初期にダダイズムに傾倒しており、その傾向の俳句も作つてゐるが、俳句がスケッチあるいはエッセンスとなつて後の散文作品が生まれてゐるのではないかという意見もあつた。⁽⁵⁾「夏

の花」に挿入された詩はエズラ・パウンドのいうイマジズムに近い手法で書かれているのではないかという発言もあつた。また「夏の花」で「さつと転覆して焼けてしまつたらしい電車や、巨大な胴を投出して転倒してゐる馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思へるのである」というときの「超現実派の画」が何を想定しているのかはつきりしないが、たとえば麿光の作品なども考えられるのではないかという発言もあつた。

次に話題になつたのは腕時計についてであつた。原民喜の「原爆被災時のノート」は「今本ハ女房ノ死体ヲ探スノニ 何百人ノ女ノ打伏セニナレルヲ起シテ首実検ヲシタガ腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカツタト云フ」と結ばれており、これが「夏の花」のNの話や「廃墟から」の「行衛不明の妻を探すために数百人の女の死体を抱き起して首実検してみたところ、どの女も一人として腕時計をしてゐなかつた」という記述のもとになつてゐると考えられるが、これは敗戦間際の女性が腕時計を身につけられないような状況にあつたということなのか、どのように解釈すればよいのか分からぬという意見が出された。これに対しても被爆による遺体の損傷が激しくて妻が身につけていた腕時計を目印にして探ししかなかつたということではないか、あるいは遺体が残つてゐるのと矛盾するが原爆による熱が腕時計も溶かすほどのものであつたという強調表現なのではないか、という意見もあつた。また時代は下るが岡本眸の「つばくらや嫁してよりせぬ腕時計」（一九七六）という句が示す通り、腕時計は装飾ではなく、持ち主がいわゆる職業婦人であることを指示する記号になつており、探してい

る妻が専業主婦ではなかつたことを表しているのでないかといふ発言もあつた。

最後に話題になつたのは引用についてであつた。ほとんど他人の発言を引用せずに「夏の花」を書いた原民喜とは対照的に、新聞記事や科学者の発言などを多く引用して「屍の街」を書いた大田洋子は後に、〈私は作家が客観的にものを書かなくてはならぬといふことに、ある疑問を抱く日もあつた〉と言い、〈いずれの日か私は、不完全な私の手記を償うべく、かならず小説作品を書きたいと思つてゐる〉と語つてゐる⁽⁶⁾。大田洋子のようにさまざまの人間の発言を引用して多声的に書くことによる可能性もあるが、原民喜のように引用せず主観的に書くことによる可能性もあるのではないかという発言があつた。また「夏の花」を原民喜の想⁽⁷⁾念によつて統括された小説とする見方があるが、その想⁽⁷⁾念とは何なのか、想⁽⁷⁾念で統括できないことを表すことが一つの想⁽⁷⁾念であるという見方もできるのではないかという発言もあつた。

発表から七〇年以上読み継がれてきた原民喜「夏の花」をめぐる議論は多岐にわたり、予定された時間には收まらなかつた。今回の再読が「夏の花」を新たに読み継ぐ一助となることを願つてゐる。

注

1 伊藤詔子「アルンハイムの領地」と「人生の航路」——ボートマス・コール（『ディズマール・スワンプのアメリカン・ルネサンス ボーとダークキヤノン』音羽書房鶴見書店、二〇一七・三）は「アツシヤ家の崩壊」の語り手が〈館の姿を一目見るなり〉それを〈凶兆のメ

2 〈新しい人間〉は原民喜のテキストにおいて〈新しい人間が見たいといふ熱望は彼にもあつた〉（『冰花』（文学会議一九四七・二））、〈『新しい人間が生れつつある。それを見るのはたのしいことだ』（東京の友人、長光太からそんな便りをもらうと、矢も盾もたまらず無理矢理に私は東京へ出てまいりました。／『新しい人間』を求める）とする気持は今もひきつづいてゐるのですが、それにしても、今ではその気持が少し複雑になつています。何といつても、敗戦直後は人間の悲惨さえ珍しく、それにはそれにつづく漠たる期待もありました。三年を経た今日では人間の生存し得るぎりぎりの限界にまで私は（生活力のない私は）追いつめられてゐます。この手紙を書きながらも、ふと空襲警報下にあるような錯覚と氣の減入りを感じるのもそのためなのでしょう。）（『二つの手紙』（月刊中国一九四八・二））、「たしかに私は死の叫喚と混乱のなかから、新しい人間への祈願に燃えた。薄弱なこの私が物凄い餓餓と窮乏に堪へ得たのも、一つにはこのためであつただらう。だが、戦後の狂瀾怒濤は轟々とこの身に打寄せ、今にも私を粉碎しようとする。」（死と愛と孤独）（群像一九四九・四）といつた形で記されている。

3 原民喜「永遠のみどり」（『三田文学』一九五一・七）。

4 江種満子「夏の花」（原民喜）（『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・

八)。

5 横本由貴「原爆作家」原良喜の俳句創作（「社会文学」二〇二二・八）は「伝達性の強い〈水をのみ死にゆく少女蟬の声〉と、伝達性の弱い〈吹雪あり我に幻のちまたあり〉の二句の関係は、記録性を評価された「夏の花」と、「メッセージ性」の「脱構築を誘発する」と評価された「鎮魂歌」との関係に類似していることなどを指摘した上で、「原にとつて俳句創作は戦前戦後を問わず創作のための試金石であつた」と論じている。

6 大田洋子「序」（『屍の街』冬芽書房、一九五〇・五）。大田洋子は『夏の花』について「原爆弾を素材とした感覚的な作品で、その傾向に必ずしも感服しない」「死の魔手」（「婦人公論」一九五一・五）としながらも「夏の花」をよむ場合、てつきり私は作品の芸術性を追いかけているのである」「文学のおそろしさ」（「新潮」一九五六・三）とも語っている。